

3. 「農民の自立性」の構造と形成の視点を

東 敏 雄（茨城大学）

昨年来の共通課題をめぐって、一、二、三思いつくままを書いておきます。

方法論的な問題点は、研究通信を通して昨年来、再三提示されています。現在の主要な課題は、第一に高山さんも指摘されているように（研究通信九六号）、蓮見さん、安孫子さん、高橋さんなどによつて提起されている問題点自体を具体的な実態報告の中で批判的に鍊磨し、家を問題とするばあいの方法上の共通認識を形成してゆくことだと思います。そして第二には、更にそれぞれの専門領域を踏えた家についての方法論を、すでに提起されている論点との関連を意識しながら、研究会全体の検討素材として提供してゆくことでしょう。そして第三には、第一、第二と密接に関連するわけですが、現在において家を究明することの意義を鮮明にしてゆくことと思われます。

昨年の遠刈田大会において、宿題委員会から、いわば討論の柱として提起された青刷りには、第一点を具体化してゆく手がかりが意識されて書かれていたと思います。そこでは、たしか、日本資本主義の形成・発展に伴う農民の家の変容過程が共通課題であるといつて、その目的には現段階における日本資本主義と農業、農民とのかかわり合いの解明がすえられていたと記憶しております。そして、

このかかわり合いの具体的な局面として、労働力編成ないし家族協業の様態、家屋とくに土地の所有と相続、家計の構造が指摘されたいたわけです。これらはいずれも、蓮見さん、安孫子さん等による家をめぐる方法論的具体化といえましょうが、昨年の大会においてはその脈絡が鮮明にならないで、有機的な関連を欠くという感みがないわけではなかつたと思います。今年度の金沢大会においては、このような欠陥を補う、なんと申しましようか、技術的な配慮が必要となるのではないでしようか。この点につきましては、研究通信九六号の高山さんの前年度の論点整理に拠つてもう一度、かかわり合いの具体的局面を通して問題にしようとしている抽象的な問題意識を確認しておく作業が必要であるようにも思われます。あるいはこれは、個々の会員の仕事かも知れませんが、ともかくそれは、三つの具体的な局面で把握される農民の家、家族から再び日本社会における都市と村落という問題の出発点に立てるための具体的道筋を確認しておくことがあります。

このようないわば技術的な配慮とは別に、前の第二点として、すでに提起されている視点に次のような観点を加えてみてはどうでしょうか。どうもいまのところ漠然としていますが、農民の行動様式における自立性の問題です。自立性とはいおう家の村落からの自立性、家族の家からの自立性、家族個々人の家族という集合体からの自立性とでも理解しておいて、行動様式については、農民経営の生産面における自立性と私的・社会的生活における自立性とを結ぶものに重点をおいておきたいと思います。先年の研究通信で安孫子

さんは、農民の家族労働報酬の水準と都市労働者の所得水準あるいは賃金水準の数量的比較それ自体にどまらないで、なぜ、前者が後者にリンクされてゆく傾向を持つことができるのか、その根柢こそが問題だ、というような趣旨の発言をしています。わたくしも、この「何故」というところが大切と思います。安孫子さんのこのような発想の前提には、蓮見さんの云う超世代的な連続体としての家と、家族との相互関係を歴史的段階的に把えようという志向があつて、そのきめ手が家の機能だという認識があるようです。そして、この家の機能は生産単位および生活単位としての両機能によって形成され、この両機能の結合様式の差こそがきめ手としての家の機能の歴史的段階差としてあらわれるとしています。このばかり、一般的に、そもそも家なるものが人間の歴史のある時期に、両機能の結合によって形成されたものであるのだから、この両者が分離してゆくことはそのようなものとしての家を前提とした家族が解体してゆくことを意味するのであろうという理解が前提されていると思われます。そして、生産単位、生産の労働組織の側面から圧力を受け生活単位としての側は受身にまわるようなほんらいの農民の家、そして両者がきりはなされ生活単位として自立している労働者の家。この二つの家はおなじく家という表現はどるととしても全く別、つまり歴史的に原理を異にするものであって、わが国における戦後の農民の家はこのような原理の移行をおこなっているのではないかと主張されているようです。そしてこのような論理の展開の中心が農民の家族労働の評価の問題となるのでしょう。そして、それはまた、現在の農村の解

体、農民層分解の理解に貢献するものとして、問題とすることの意味をもつものとされています。まあ、このように理解してよいとすればやはり、先の「何故」というところがキイ・ポイントにならざるを得ないと思います。

そこで再び、先の自立性の問題に戻るわけですが、安孫子さんの家族労働の評価についても、あるいは先の青刷りの三つの具体的なかかわりあいについても、究極においては農民の私的・社会的生活、そこにおける行動様式のさきに羅列したような自立性の発展あるいは限界、あるいは特徴と関係させてみるとより一層の意味を持つのではないかとも思われます。この自立性の構造をさきのような思いつきではなくより精密なものとして把握してゆくこと、そしてさらに、自立性を問題とすることの現段階的な意義を村研の中での従来の議論と関連させながら明らかにしてゆく必要があるようになります。そのような総合的な検討はいまのところ用意がありませんので、別のこととして、当面は、先に述べたような自立性の形成の度合、あるいは限界を確定しておくことが、実践へ農村を自立の思考の場として造りあげてゆき、一般論的には労働者との連帶性の前提としての自立的思考の農民層が拡大してゆくという方向性をもった各種の実践)にとつても重要な意味をもつであること、また、同じことですが、農村の理論的把握にとつても重要な意味を持つことを予想しておいて、次のような問題視角を列挙してみたいと思います。

第一は、明治末から大正期にかけて、例えば岬嶋衆三さんが前費用価格ということで問題としたようないわば近代的産業人(これ

は私の解釈による表現です)としての方向性をもつた農民層の変化(この変化は戦前の段階における自立化の基礎と考えられます)と戦後段階におけるいわゆる自家労働力の評価とが、どこでどう違うのか、それを発展段階的に関連させて、あるいは区別して考えることです。実は、後で、金原左門さんが大正デモクラシー状況の基礎として把握されているところも、このような明治末、大正期以降の農民層の変化と思われますし、また昭和期になって、ファシズムの下に編成されてゆく、その上からの枠組み・強制とは別の、下からの自発性めいたものの可能性の基礎もおなじものの他の側面とも考えられますので、そこら辺を意識した関連は戦後を考えるばあいにも重要ではないのかと思うのです。

第二には、戦前との関連を大まかにでも意識したうえで、戦後の昭和二〇年代、三〇年代、そして現在のそれぞれの時期を自立性の構造と限界という視点から特徴づけることも、意味があると思うのですが。ここではおそらく、農民の労働力の価値評価が戦後の時期的特徴をもつたものとして検討される必要があるのではないかと思います。

第三は、むしろ順序としては逆ですが、自立性なるものの構造を細かく検討してみるとも独自の課題になるのではないかと思います。ここでは、小農経営の経営としての自立性・完結性ということだけでなく、それが農民の私的・社会的な行動へ生活面だけではなく生産面、その統一の局面も含めて)とどう関連してゆくのか、また、それはそれその時期の中でどのような社会全体的な意味を

持つのか、そんな方に重点をおいた検討も必要ではないのかとも思われます。

以上とり急ぎ、宿題委員の責任の一端を、と思って筆をとりました。羅列的である上に他の方の御意見について誤解があるかもしれません。そのときはお許し下さい。